國學院大學学術情報リポジトリ

話題提供2"見る-見られる"関係としての保育者およびその育成：人形劇の制作・上演活動の実践を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 健介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001299

話題提供②

〝見る―見られる〟関係としての保育者およびその養成
―人形劇の制作・上演活動の実践を通して―

東洋大学ライフデザイン学部准教授　**高橋　健介**

東洋大学における保育・幼児教育

皆さん、こんにちは。東洋大学の高橋と申します。今日は学校全体や学科のカリキュラムの話ではなく、ゼミの取り組みについてお話しさせていただきたいというふうに思っています。本学の学科専攻は百名の定員なのですが、そこを十一名の教員が担当しています。大体、一学年九名ほどのゼミです。

その前に少し大学の話をすると、大学自体はもう古い大学なのですが、東洋大学で保育者養成を始めて今年で十一年目になりました。私自身は今、ここに所属して七年目なのですが、赴任した当初、現場に実習で挨拶に行ったりすると、東洋大学で保育者養成やっているのですか、ということをかなり多くの園から聞かれました。大体そういうときになると「駅伝頑張っていたね」とか「水泳頑張っていますね」とかという話が多いのです。本当にそっちの方で有名なのですが、そういった意味で保育者養成のことはあんまり知られていないのですが、いつか「保育・幼児教育の東洋大学」と言われるようにという大きな夢を持っていますので、そういうふうになっていきたいなというふうに思っています。

三つのフィールドワーク研究

本題を始める前に、今日は少し人形劇の話しをするので、少し私自身の話をさせていただきたいのです。

現場に人形劇をやりに行くと、「表現の先生ですか」とよく言われるのですが、私自身はあんまり表現力がそんなにある方ではなくて、その表現の手法もよく知らないのです。実は専門の領域は幼児教育で、子どもの遊びとか、その環境、物的環境であったり、人的環境。特に今はフィールドワークを通して保育・幼児教育の質の研究を行っています。実は十月一日から半年間、研修期間をいただいているので、それまでも週に一回か

二回は現場に行っていたのですが、授業が大変でした。今度は一週間空きましたので、なるべく週の三日、四日は現場に行って研究をしたいなというふうなことを思っています。

今、実は三つフィールドワークの研究をしているのですが、少しそれを簡単に紹介させていただきます。

まず、これは以前からやっているのですが、製作コーナー。そこにある素材と道具を用いた表現とその援助。東京都の公立幼稚園で行っている研究なのですが、かなり素材と道具が製作コーナーにあって、子どもたちが、その色んな素材を用いて、自分のイメージを具体化していく。すごく多様な表現が、そこに表れるわけなのですが、それを保育者がどう見取って、その表現をもっと広げたり、その子どもたちが、それぞれの表現を活かすことが出来るかというようなことを今、研究として取り組んでいます。

二つ目の研究は、写真を用いたドキュメンテーションなのです。この左側にあるのが、実は現場の先生が作ったドキュメンテーションを対象にするのではなくて、少し僕も時間が出来たので、では自分で作ってみようと。どれぐらい時間がかかって、どれだけそれの効果があるのか、ということを先生たちと一緒にやってみようということで、朝、ある認定子ども園に行って、十一時半ぐらいまで保育を見させていただいて写真を撮るのです。そして十一時半ぐらいから職員室の片隅を借りて、Ａ４用紙で大体、自分に関してのものは二枚ぐらい作ろうと。二枚ぐらい作るのに、何回かやってきて、最初二時間ぐらいかかったのですが、大体、今一時間半ぐらい。それでも、少しかかり過ぎだなと思っているのですが。それを作ったものを今度二時から、認定子ども園なので、まだ子どもたちは全員いるのですが、その時間参加できる先生たちで集まっていただいてカンファレンスをする。このドキュメンテーションを介して、幼児理解を広げたり深めたりしていこうと。私自身第三者で写真を撮っているので、やはり先生たちも、「こういう子どもたちの姿があるのですね」とか、「案外、子どもたちは先生を見ていたりしているのですね」だとか。そういったような気付きがあったりするのですが、これも今六回ぐらい続いていて、これから半年間続けて、何かこの記録の効果や、効率良く作れる方法を少し考えていけたらなというふうに思っています。

そして三つ目が、これも認定子ども園の午後の保育の研究ということで、午前中、二時までは一号認定、三、四、五歳ですが、一号認定と二号認定の子どもたちは一緒に保育しているわけです。午後になると、一号認定で残る子もいるのですが、帰る子どもたちもいます。この子ども園では、午後の保育クラスを異年齢のクラスに編成して、そこに担任の先生を置いて、午後の保育。長時間の保育というのがありますから、そこで子どもたちが安定したり、また午前とは少し違った異年齢としての遊びが展開できないかということで、今、研究を進めている。その午後の保育、今までやっていた預かり保育も、確りとそういうふうな意味で保育内容とか考えられてきたと思うのですが、もう少しその専門性を高めて、認定子ども園の一日の生活をしっかり構築していこうというような意図があります。

こういった研究を、いわゆる実際にフィールドワークとして記録をとりながら、現場の先生と一緒にカンファレンスを伴いながら研究していくという手法で行っています。

〝見る―見られる〟関係

今日の本題に入るのですが、テーマは、「〝見る―見られる〟関係としての保育者およびその養成」ということ。副題は「人形劇の製作・上演活動の実践を通して」ということです。まず、テーマにある〝見る―見られる〟関係。これはどういうことか。小川博久は、保育者を〝見る―見られる〟関係のパフォーマーとして捉える（『遊び保育論』萌文書林、二〇一〇年）。幼児たちの憧れは、単に先生が好きだということでも、先生が作ったものをすてきだというものでもなくて、先生が作っている姿だ。これが格好いいとならなくてはならないと意味付けています。さらに遊びの継続や発展を促す幼児の作る活動は、保育者の表現者としての作る姿、遊びモデルから動機付けられると論じています。さらに集団保育における一対一の関係だけではないので、そういう集団保育における保育者の役割行為については、幼児から見て保育者が自分だけを相手にしてくれるかのような関わり。つまり一人一人に対応するかのような、そういうふうに見えるような役割、演技をするということが必要だと論じています。まずそういった意味で保育という舞台では、保育士はこの舞台にふさわしい役割を演じると。だから保育者のそういう演じるという行為を、すごく重視しております。

因みに、今、映し出している写真ですが、これは小川先生がかつて指導に行かれていた、関東にある公立幼稚園の保育の場面なのです。一番奥にあるのが製作コーナーです。奥に先生が座って、何らかのものづくりをしている。モデルを見せている。先生のその位置は、子どもたちからやっぱり一番見え易い所。先生も子どもたちの様子が見易い場所に座って、モデルを提示している。子どもたちは自分たちがやりたいこともやっているのですが、何人かはやはり先生の様子をじっと見て、それに動機付けられているというような姿がある。こういうような、先生がモデルを示したり、先生が見守っているということが、子どもたちそれぞれの活動の安定感を生み出すのではないかと考えられると思う。

また、これは、長野県のある森の幼稚園の一場面の写真なのですが、先生が薪割りを始めている。実は次の日のカレーを作るための薪割りを、あえて保育の時間で子どもたちがよく見えるような所で割り始める。そうするとやはり子どもたちが、何をやっているのだろうと興味深く見ている。先生もあえて、その子どもたちが帰ってから薪を割るのではなくて、子どもたちによく見える所で意図的にそういうパフォーマンスを見せている。実際子どもたちの中で「やりたい」と言う子がいると、もちろん薪割りですから危ないので、先生が手を添えながら一緒にやっているという姿がありました。

それで、僕自身もちょっと現場に行って思うところでもあるのですが、実践の中で、特に遊び場面の実践では、保育者は物的環境を構成し、その上で環境に関わって遊ぶ幼児を見る、見守るといった行為について、こういう役割としての自覚が高いことが考えられる。実際にそのような保育者の姿というのは多く見られると思うのです。

さらに、見守る中で必要に応じて幼児の遊びに直接的に関わる場面。でもこういった場面では、大体言葉を通して、介して、指導をしたり、援助をすることが多いと思う。そういった場面

はよく見られるかと思います。

もちろんこのような保育者の役割は、幼児の自立を促したり、未熟な幼児に対する必要な援助であることは考えられますが、しかしながら、保育者が意図して身体的な遊びモデルとしての役割を演じることは案外少なくて、実際そういうことを意識してやっている園もあるのですが、あえてこうモデルを示すということを自覚して行っているという所は、むしろ少ないのではないか。そして実際には、幼児からよく見られているのです。そして見られている存在であるということ自体も自覚する。そういう自覚する機会も少ないのではないか、少なくなっているのではないかというようなことを考えます。

そして、そういったことから、保育者にとって、幼児を見る立場であるとともに幼児から見られている立場であることも自覚して、幼児の主体性がより発揮されるためにも、幼児を魅了して動機付けるような遊びモデルを意図的に演じることが必要ではないかと言うのです。つまり保育者は幼児との関わりにおいて互いに、保育者から見て、子どもを見たり見られたり、子どもにも保育者が見たり見られたりする。そういう〝見る―見られる〟関係を構築する必要があるのではないかというふうに考えています。

東洋大学学生の状況における保育者養成としての課題

では、今回は保育者養成の話なので、保育者養成のところに帰ると、本学の学生にとっては、そうした状況の中で、どういう課題があるのかということです。

まず、一つは、学生自身が何らかの表現者として自ら表現する機会は少ないのではないか。特にうちは割と大きな大学で、一年生、講義科目で大きな教室でやる科目も多いため、割と教室に座って話を聞いている。もちろん普段の生活の中では、色んな表現の機会があるのかもしれないし、カラオケも好きだったりしますが、それでも何か、自分自身から表現して、みんなに見せるという機会というものが、思ったより少ないのではないかというふうに思っています。また、授業などの公の場で他者から何らかの形で評価されると本当は嬉しいのかもしれないです。しかし、関心を持たれたりすることに消極的な学生が多いのではないか。多人数の授業で自ら発言する学生は、うちの大学は本当に少ないなと。もう少し自分の意見を素直に出してみたらいいのではないかなと思うのです。僕自身の授業の仕方が悪いのかもしれないのですが。

本来的には、実は案外、マスの中に埋もれていたいというような学生も多いかと思うのですが、一方で何か関心を向けて欲しい。名前を覚えたりすると「先生、名前覚えているのですね」とよく言われるのです。僕自身は、そういうふうな関係性の中でやりたいので、あまり名前を覚えるのは得意ではないのですが覚えようとします。すると学生は案外びっくりして、「先生、私のこと知っていたのですか」とか言われることも多いのです。しかし一方で、あまり人前では話したくありませんというようなところも多いのではないかと思っています。

今回のシンポジウムの副題「教育・保育の課題を自ら発見し、自己研鑽していく力」。これがすごく大事だと思うのです。僕自身、こういう力をなぜ身に付けるかと言ったら、やはり自分

自身の研究、いわゆる卒業研究、卒業論文を書くということ。だから、保育実践というのは割と実践的な場面が多いと思うのですが、やはりその課題を見つけて、それを探求していく力というのは、これからの保育者にとってはとても大事なのではないかと思うのです。

実はうちの学科は卒業論文が必修ではないのです。選択科目なので、書かなくても卒業できるのです。ですから割と「書きたくない」と言う学生が多いのですが、そういう雰囲気もあるので、なかなか研究ということにならない。卒業研究とか卒論に対して、他の人がどんなことをやっているとか、その他の人がどういう意見を持っているとかということに対して、自分もそうなので、多分その相手がやっていることにも関心が薄い。そういう学生がやはり多い。今、改めて卒業論文をどうするかということを検討しているのですが、そういった状況もあるので、ゼミ等でも活発な議論が成り立ちにくい。これはずっと僕自身がこの大学で仕事をし始めてから、もう一番悩むところです。もっと学生たちが研究をするということに対して前向きになって欲しい。人のやっていることに対して関心を持って聞いたり、それに対して意見を言って欲しい。質問でもいいのです。感想でも。そういうふうになって欲しいということを、常日頃思っていました。

それで一時期、しっかり個人個人で指導して行けば、その子たちが伸びるのではないかというような思いもあったのですが、いや、それもなかなかうまくいかないのです。それで、むしろその学生個人の積極的・主体的な研究活動の基盤としては、まずはゼミの中での集団としての育ちが必要なのではないか。例えば、互いの意見や研究等に関心を持つような関係とか、探求し意見し合うもの。まずは関心を持って欲しい。だから、やっぱり個人個人の研究指導では、そこで伸びる学生もいるのですが、少し限界もあるかなということも思っていました。

表現力、演技力向上、協同的な活動としての人形劇

そういった学生の課題もあり、今の保育の課題もある中で、表現力とか演技力向上として、人形劇ということをやってみたらどうかと考えました。いわゆる協同的な活動として、みんなで作り上げていくような人形劇をやってみたらどうかということです。だから僕自身、そんなに専門性はないのですが、割と子どもが小さい頃、よく見に行ったりして、なかなか面白いなとか、これは学生にやってみたらいいかもしれないということで、少しずつ自分なりに研究を進めていきました。

それで、もう何年間かやっているのですが、うちの人形劇の特徴を整理します。学生たちも最初は演技することがいっぱいいっぱいなので、少し慣れてきたら「こういうことを大事にしろ」と言っていることなのですが。

まず一つは「出づかい」。「出づかい」というのは、人形劇というと、人形だけ見せて人は隠れているイメージがある人もいるかもしれないのですが、人間も隠れずに人形と共に顔を出して演ずる。これを「出づかい」というのです。割と今、現代人形劇、プロの方たちはそういうふうな仕事やっている方もいますし、日本の伝統的な文楽なんかも、そういう「出づかい」で演じている。なぜ、こういうことをやっているのかと言えば、

色んな意味はあるかと思うのですが、僕自身は、やはりここの写真にもあるように、まず演じながら、子どもたちを見て欲しい。隠れていると見えないのです。だから、演じながら子どもを見て、子どもたちの雰囲気を感じて欲しいですし、そして出来ればそれに応じて応答的に演じて欲しいというようなことを考えています。だからある意味で、この人形劇の空間の中で、学生と子どもの〝見る―見られる〟というものを作って行きたいというふうに思っています。

それと、もう一つ大事にしているのは、最初は学園祭でやるのでホームなのですが、そういう所で、やり易い場所でやっているのですが、基本的には、そこを終わったら外にどんどん出ていきましょう、ということです。もちろん学生たちと私との間の時間の折り合いがなかなかつかないこともあるのですが、チャンスがあって、来て欲しいと言われたなら、どんどん出ていきましょうと。その中で、やはり保育現場に行って、その保育の雰囲気や様子を見たり知ったりする。案外、教えてくれたりもするのです。そしてそこで子どもたちと。これは保育を学ぶ学生にとってみたら、とても意味があるのではないかなと思うのです。

現場に行くということよりも大事に思っているのが、色んな場に行くと、色んなことが起こるのです。想定外のことがたくさん起こるのです。例えば、舞台の設置をしましょう。下見してから行くということは、殆どありません。学生が色々聞いてきたりしている中で、「大体こんな感じだ」と言って、バッと行くと案外、幕をどう張ればいいのかとか、普段、ホームでやっていることと全然違ってくるので、学生はすぐ「出来ません」とかと言うのです。いや、少し考えれば、何か工夫出来るのではないか。「いや、こんなに狭いと楽器置けません」とかということをすぐ言って来る。でも、やる時間は決まっていますから、それに向けてできることを考えていく。実際に子どもの反応も、もう何回か行ってみると各現場で全然違うのです。年齢も違ったり、人数も違ったり、多分その園の保育、雰囲気のようなのも全然違ってくる。いつも、やはり違う。だから、子どもたちを見ながら、そういう空気を感じて演じるということが大事だと思う。常にそういう状況に応じた対応が問われるというか、そういうところがあるのです。

それで、ちょっと今年のプロセスをざっと見ると、大体最後の学園祭が一つの目標になるのですが、それに向けて、色んな協同的な部分もある。山登りもしたり、一から人形も作り上げたり。大体、原作をお借りするのですが。それも原作者や出版社とも色々交渉したりしながら進めていくのです。

大体、毎年二十二～二十三分か二十五分ぐらいのものが出来るのですが、それを全部流すと時間が無くなるので、今日は今年学園祭で上演したものを五分ぐらいに編集して持って来ました。雰囲気を見ていただけたらなと思っています。

〔映像〕

これは『くまくまパン』という原作の人形劇です。日本女子大の、先ほど少し話に出た学童クラブで演じさせていただいたもので、人数が少なかったのです。ですから、本当に近くにいる子どもたちに向けてやろうということで、やっているのです。

因みに、東日本大震災があり、その地元の方たちで僕の知り

合いがいたので、ぜひ来てほしいということで、ゴールデンウィークに行きました。ボランティアセンターで、みんなで泊まってやりました。本当に現場に行くと、色んな想定外のことがたくさんあって。学生もすごく葛藤しながら学んだのです。だから、そういったところから僕自身も、やはり現場に行って学生と共に一緒に考えていくというのが、とても大事なことだなと感じました。実際に演じた後に、子どもたちに人形と遊んでもらうのですが、実際に行ったときには本当に子どもたちが、普段やっているときよりも、すごくよく遊んでいたのです。本当にずっと遊ぶような姿がありました。

折角なので、もう少しだけ。舞台の中も、どんな姿で学生たちがやってるのかな、という所を遠くから撮っています。

〔映像〕

もちろん、殆ど始まったら中で座っているので、やることは大体決まっているのですが、まずお互いを見合いながら、いいタイミングでこうやって、グーッと動いていく、というような感じで、楽器もあったり、実際に小道具を動かしたりする学生もいます。大体九人ぐらいで、いつもやっているのです。場面が変わる際はそれぞれタイミングを計りながらやっています。

これまでの実践を振り返って

まとめなのですが、これまでの実践を振り返って考えたことです。うちのゼミは、人形劇やりますよ、もちろん人形劇だけではなくて遊び研究もしますよということで集まってくるのですが、そんなに表現するのが大好きという人が集まっているわけではないのです。いつもそういう傾向なのですが。でも実際にやってみると、表現することに自信を持ったりして、よく学生が「多分、自分自身が体を使って直接演じるというのは、やはり苦手なのだが、人形があったからできました」というようなことを言っています。人形を用いて、それを介して子どもと関わることで、実際自分が見られていたり、そういうことを自覚して経験的に学んでいるのではないかということです。

それから、集団で作り上げていますので協同性を高める。意見を交わし合ったり、いわゆるアイコンタクトとか身ぶりでコミュニケーションを深めて来ているのですが、実際にそれぞれ三年生から卒論に向けて研究活動をやっているのですが、こういうことをやると、やはりゼミの中で意見の出し合いも思ったより活発になっていくのです。だから、人形劇がうまくいかないと、なかなか他の人にも関心が持てなくなったりもします。何となく、これもすごく僕自身の感覚的なものなのですが、やはり関連しているな、と思うところはあります。

最後に課題なのですが、実際にこれが保育者としての育ち、特に卒業してからどういうふうに保育者として、見るとか見られるとか、表現する力に繋がっているのかというのは、まだ厳密に検討されていないので、今後、現場で働いている卒業生にもインタビューしながら検討を進められたらというふうに考えています。

以上です。ありがとうございました。